

九国プレ2015

国語

九州国際大学附属中学校

【注意事項】

- 1 開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。
- 3 試験時間は50分です。
- 4 解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。
- 6 答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

字数制限のある問題については、句読点なども一字とします。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。また、また習っていない漢字については、ひらがなで表記したり、読みがなをふったりしています。

ネットワークにつながったコンピュータには「オフライン状態」と「オンライン状態」があります。オフライン状態のコンピュータは、外部と⑥コウシンせずに、すでにインプットされている情報やソフトウェアを⑦モチイて作業しています。

⑧ A、オンライン状態のコンピュータは、インターネットなどで外部とコウシンしながら新しい情報やソフトウェアを取り入れながら作業します。人間にもまた、オフライン状態とオンライン状態があるようです。オフライン状態はいわば日常生活で、あまり新しいことを取り入れることはありませんが、オンライン状態では新しい情報を取り入れて、自分の行動や思考を変えていきます。

⑨ ぼくの場合、旅行に出ると自然にオンライン状態になります。いま住んでいる日本にいても当然、オンライン状態になることがあります。旅に出れば、どちらを向いても新しい情報がたくさんあるので自然にオンラインになるのです。

動物はみな、本能にもとづいて習慣的に行動します。人間もまた動物で、強い習慣性があります。そして、習慣的なことに対しては、毎日の生活で疑問に感じることもありません。

⑩ B 旅に出ると、(あ) 日常な環境に放り出されます。そうすると、自分がいままであたりまえにやっていたことに疑問をいだくきっかけが生まれます。日々、あたりまえのようにやっていたことにも別なやり方があることに気づくのです。それが①オフラインからオンラインになることにつながります。旅先でなら、自分とはちがうことをしている人を見て、単に「こいつらは変だ」とか「おかしい」と思うのではなく、「この国の人とはみなこういうふうにやっているようだから、②イチリあるんじゃないか」と考えることができ、ひいては「自分もやってみようじゃないか」となります。そして、③こういった経験を通して自分のそれまでのやり方、人生を考え直すことになるのです。一人でいると、心細さも手伝ってか、情報を④セツキョク的に取り入れてオンラインになることが多いのですが、同じ旅でも⑤フクスウの日本人といっしょに行動していると、見られないもののやり方、考え方を知っても「変だ」とか「おかしい」と結論つけて、オフラインのままになってしまいうこともよくありますから注意が必要です。

⑪ (い) 「()」ということわざがあります。『広辞苑』によると「灯台の直下はあかりが暗いように、手近の事情はかえってわかりにくいものである」とあります。

⑫ ③ぶだんの環境にあつて自分の人生を考え直したり、おさらいしたりしようと思つても、それは難しいのです。 C、ちよつとはなれて自分のことを考えるために旅に出るのです。

(『ピーター流わくわく旅行術』ピーター・フランクル)

問一 ――― a) e) のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなが必要なものは適切に送りなさい。

問二 A) C) にあてはまる最も適切な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ しかし ウ だから エ 一方

問三 (あ) (日常) (あ) には、下に続く「日常」を打ち消す漢字が入り、三字熟語として完成します。その漢字として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不 イ 無 ウ 未 エ 非 オ 否

問四 (い) (い) にあてはまることわざを、あとの『広辞苑』の解説を参考にして答えなさい。なお、ひらがなでもかまいません。

問五 ①「オフラインからオンラインになる」ことによって、人間は自分の何を変えていきますか。文章中から五字で書きぬきなさい。

問六 ②「こういった経験」が指し示す内容をまとめた次の文の [] に、指定された字数で、文章中から書きぬきなさい。

人間が [1 (二字)] に出ると、 [2 (五字)] のようにやっていたことに [3 (二字)] が生じ、その国の別な [4 (三字)] を自分でも [5 (六字)] とする経験。

問七 ③とありますが、筆者はなぜ「難しい」と考えていますか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問八 次にあげる文について、本文の内容に合っているものには○を、そうでないものには×を、それぞれつけなさい。

- ア 旅のよきは、自分のそれまでの生き方や人生を考え直すきっかけを与えてくれるところだ。
- イ コンピュータは、人間と似ている点があるから、幼いころから情報教育を行った方がよい。
- ウ 旅先ではすべてが新しい環境で心細いから、なるべく大勢の友達と旅行するのが望ましい。
- エ 今住んでいるところでもオンライン状態になることができるので、感性をみがいでいこう。

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。また、まだ習っていない漢字については、ひらがなで表記したり、読みがなをふったりしています。

その後、三匹ほど普通のザリガニを釣り上げた。

けれど少年にとつては、すでに意味のない収穫だった。十二匹以上釣るといふ当初の目的は、どうでもよくなっていた。さっきの①マツカチン——あいつを釣り上げないことには、何匹釣ろうと意味がない気がする。

どこか沼の深いところに行ってしまったのか、それから三十分以上釣り続けても、さっきのマツカチンはエサに食いつかなかった。その間にもサキイカはふやけていき、まるでボロ布のようになってきている。

(さっき釣れてればなあ)

今さらながら、逃がしたことが悔まれた。特に二回目の時は、自分がちっぽけなザリガニに負けたような気がしてイヤな気持ちになった。

「どうして、お前にボールが捕れないのか、教えてやろうか？」

いつだったか——やっぱり野球に入れてもらえずに点数係をやった日の帰り道、兄貴の言っていた言葉がふっと耳元でよみがえる。

どうして自分を野球に入れてくれないのかと抗議した少年に、兄貴は「ボールが捕れないからだ」とアツサリ言った。そして、教えてくれたのだ。

「お前、ボールが飛んできたなら、絶対に目をつぶるだろ。それじゃ捕れるはずがねえって」

「だって、こわいんだもん」

兄貴の言葉に、少年は答えた。四年生の兄貴たちが投げるボールは、一年生の自分には速すぎる。もっともゴムボールだから、体のどこかに当たっても、すごく痛いというのではないのだが。

「だったら、せめてたたき落とせばいいじゃないか。お前は、それもしようとしないで、すぐに目をつぶるだろ……お前、こわさに負けてるんだよ」

「じゃあ、どうすればいいのさ」

「気合だろ」

兄貴は何でもなしに言った。

「ボールから、絶対に目をそらさないって気合を入れるしかないよ。そしたらボールが見えるようになるから、いつか絶対捕れる」

その時、少年は兄貴の言っていることはデタラメだと思った。自分に足りないのは気合なんかじゃなくて、野球の才能なのだ。才能が足りないから、ボールが捕れない。

(でも……違うのかもしれないな)

さっきのマツカチンとの戦い(㉞)そう、あれは戦いだ)で、自分はいいつの迫力に負けてしまった。つまり、それはあいつの方が気合が入ってたってことなのか。そう思った時、㉞再びさおを引っ張られた。反射的に強くにぎると、タコ糸がピン！と張る。

(来たっ)

この引きの強さは、普通のザリガニじゃない。絶対にマツカチンだ。

少年は息をつめると、慎重にさおを上げた。思ったとおり、マツカチンがサキイカに食いついている——何の**⑥保証**もないが、少年は絶対にさっきのヤツだと思った。
(今度は負けないぞ)

今までの経験で、少年は知らず知らずのうちにコツを体得していた。

あまり高く釣り上げると体の重みで落ちてしまうから、なるべくギリギリまでザリガニを水の中に入れておくのがいい。けれど、完全に水の中だと逃げられてしまうので、体の半分ほどが水面に出た状態をキープするのがいい。また手元に引きよせるスピードも、速すぎず遅すぎずを心がけなくてはいけない。

(気をつけて……気をつけて)

少年は頭の中でじゅもんのように繰り返しながら、**②機械**になったような気持ちで、マツカチンを引きよせた。ヤツがくらくらいつているサキイカは、いい**③加減**にふやけてしまっているの、それも考えに入れなくてはならない。

やがてマツカチンを沼の水辺にまで引きよせるのに成功し、少年はさおを立てた。このまま釣り上げて粉ジュースの缶の中に落としこめば、自分の勝ちだ。

突然、マツカチンが**④暴れる**。体全体をくねらせ、その動きが糸とさおを通って手にも伝わってきた。

(こいつめ……逃がさないぞ)

さっきは、このパワフルな動きに圧倒されて逃げられてしまった。でも今度は、絶対に負けないと決めたんだ。

少年はじつと目を見開いて、マツカチンの動きを見つめた。ヤツが飛んでくるボールとは違うことはわかっていたが、とにかく目をそらさないことが大事だ。そう、これはおたがいの気合の勝負なんだ。

水辺から缶まで、ほぼ一メートル弱——けれど少年には、その距離が十メートルくらいに感じられた。いつマツカチンが沼の中に落ちてしまうかと思うと、本当に生きた心地がしない。

「行けっ」

やがてマツカチンの体は、粉ジュースの缶の上に来た。そのまま少し乱暴に、サキイカごと中に落とす。

「やったあー！」

少年はかけより、缶をのぞき込む。中には六匹の普通のザリガニと、そのどれよりも大きいマツカチンが入っていた。

(すげえ……俺、マツカチンを釣ったんだ)

③頭の中が白くなり、今まで味わったことのない強い気持ちがあがってくる——自分は、こいつに勝ったぞ。こいつに勝ったんだ。
近くに誰もいないのが、本当に悔しかった。

考えてみれば、家に持って帰って兄貴に見せても、自分が釣り上げたところを見たわけではないから、信じてもらえないかもしれない。人にもらったんだろうと言われ

でも、反論する材料は何もない。

けれど——別に信じてもらえなくてもいいと、少年は思った。誰が何と言おうと、自分がこのマッカチンを釣り上げたことに変わりはないのだ。

「へへへ、ざまあみろ」

少年は缶をのぞき込み、自分の獲物たちをながめた。④マッカチンが大きくハサミを広げて、ナマイキにも自分をいかくしている。

「バーカ、ちつともこわくないよ」

缶の中に入ってしまったお前に、いったい何ができるといふんだ。お前の命は、もう自分の手の中——どんなにハサミをふりたてようが、どうにもならないさ。まさしく、そう思った瞬間だ。

缶の底からマッカチンが、かがんだ少年の目の高さにはまではねあがった。

「うわっ」

少年は反射的に目をつぶり、思わず後ろにのけぞってしまった。その拍子に、サンダルの先が缶をけりたおす。

「あつ、あつ、あつ」

あわてて体勢を立て直した時には、すでに遅かった。缶の中にいたザリガニたちは勢いよく流れ出て、みんな沼の中に帰っていく。もちろん、あのマッカチンも。

「そんな……そんなあ」

にごった水辺でマッカチンが再びはね、さらに深いところへと逃げ去っていくのが見えた。

また負けた——あまりのことに少年は、沼のほとりにひきをつく。

完全に自分が勝っていたのに、最後の最後で、また負けた。マッカチンは完全に逃げ場をなくしていたのに、たった一はねで、その状況を逆転させてしまったのだ。

「こんなのって、ないよ」

⑤空になった缶をながめているうちに、何だか泣けてくる。⑤少年のほほに涙が流れ、アゴの先で汗と交じり合った。

（これが、気合というものなんだ）

少年は一匹のザリガニに、自分のあまさを教えられたような気がした。そして ※ の状況でさえ、気合一つで切りひらいていけることも。

その翌日から少年は、兄貴に頼み込んで相手してもらい、キャッチボールの練習を始めた。

※成長する

やがて彼は長じてプロ野球の選手になり、⑥どんな球でも必ずキャッチしようとする気迫のプレーで人気を集めたが、それはまた別の機会に語られるべき物語である。

『気合入門』朱川湊人

問一 —— ①～⑥の漢字の読みを、ひらがなに直しなさい。

問二 ―― ① 「マッカチン」とは、どのようなザリガニですか。それを説明した次の文の [1] [3] に、指定された字数で、文章の中から書きぬきなさい。

普通のザリガニよりはるかに [1 (三字)]、動きも [2 (四字)] で、 [3 (五字)] ことがかなり困難なザリガニ。

問三 ―― ② 「機械」になったような気持ちで、マッカチンを引きよせた」とありますが、「機械」とは、「少年」のどのような様子をたとえたものですか。次の中から、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア さっきのヤツだということを感じ取り、今度は絶対負けまいと意気込む様子。
- イ マッカチンの引きの強さに対抗して、より強い力で引きよせようとする様子。
- ウ 人間よりも強いモノになった気持ちで、マッカチンを支配しようとする様子。
- エ これまでの戦いで体得したコツ通りに、より正確に引きよせようとする様子。

問四 文章の前半部分で、「少年」が過去のことを思い出している場面があります。それはどこからどこまでですか。最初と最後の五字を書きぬきなさい。

問五 [※] にあてはまる四字熟語として、最も適当なものを次から選び、漢字に直して書きなさい。

いっしんいったい りんきおうへん ゆだんたいてき ぜつたいぜつめい

問六 ―― ③とありますが、このときの「少年」の気持ちを説明した次の文の [1] [2] には、指定された字数で、文章から書きぬきなさい。

また、 [3] には、気持ちを表す言葉を自分で考えて五字以内で書きなさい。

すでに、 [1 (一字)] 度の戦いに負けているマッカチンとの勝負に、 [2 (二字)] を入れることにより勝てたことで、自分自身を [3 (五字以内)] 思う気持ち。

問七 ―― ④とありますが、「少年」が「マッカチン」に対して「ナマイキ」という表現を使っているのはなぜですか。その理由を簡潔に説明しなさい。

問八 ―― ⑤とありますが、このときの「少年」の様子を説明した次の文の [1] [4] に、指定された字数で、文章から書きぬきなさい。

マッカチンに完全に [1 (三字)] と思っていたのに、最後の一はねで反射的に [2 (五字)]、逃げ去られてしまったことがとても [3 (二字)] く、自分自身の [4 (三字)] を痛感している様子。

問九 ―― ⑥とありますが、「少年」はなぜ、このようなプレーをするプロ野球の選手に成長できたと考えられますか。本文に即しながら、その理由を自分で考えて説明しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 漢字の読みには音と訓があります。次の熟語の読みは の中のどの組み合わせになっていますか。ア～エの記号で答えなさい。

- ① 無口 ② 参加 ③ 横糸 ④ 場所

ア	音と音	イ	音と訓
ウ	訓と訓	エ	訓と音

問二 次にあげることわざの にあてはまる言葉を、あとの意味をてがかりに答えなさい。なお、ひらがなでもかまいません。

- ① 石の上にも

〈つらくても辛抱して続けられれば、いつかは成し遂げられるということ。〉

- ② 花より

〈風流よりも実益、見た目よりも実質を重んじること。〉

- ③ 月と

〈二つのものの違いがあまりに大きすぎて、比較にならないこと。〉

問三 次の□に漢字を一字入れ、類義語(Ⅱ)、対義語(↑↓)を完成させなさい。

- ① 決意 ≡ 決 ② 公平 ≡ 平 ③ 間接 ↓ 接

